０３／０４／２７　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：信仰の成長を追求する
聖書箇所：ペテロの手紙第一　１章２２節～２章３節

いろいろな国を訪問していつも感じることは国民性の違いというものです。特に日本人にとって一番受け入れがたいことは、時間の観念ではないでしょうか。その国、所による〇〇時間というものがあるようです。また、それぞれの国の特徴もあって、それらは国民性の違いだと言います。
ペテロは私たちに教えてくれます。イエス・キリストによって新しく生まれ変わった者には新しい特徴があること、天国民としての特徴があることを…。「人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」とイエスはニコデモに言われました。人は新しく生まれ変わることが必要であること、そして、新しく生まれ変わった者はこれまでとは違う歩みを始めてゆくのだと教えるのです。これまでに私たちはこのペテロの手紙１章から、新しく生まれ変わった人というのは聖さを追求して生きるようになったことを学んできました。聖さを追求するからその人が天国に行けるのではありません。救われて天国に行ける者へと変えられたから、その人は聖さを求めて生きて行こうとするのです。神に喜ばれる聖い生き方をして行きたいという願いをもつのです。そして、それによって救いに与っていることが明らかにされる、というのです。

２２節でペテロは再び救いに関すること話します。どうすれば救われるのかというその方法と、救われた結果を教えています。救われる方法とは「真理に従うことによって」です。「真理」とは福音であり、神のみことばです。私たちは「みことば」によって救われるのです。「…によって」は結果を言っているのです。「たましいを清める」、これが救われた結果、私たちに与えられるものです。「たましい」とは、人の活力、思考、感情、その人の意志の中心です。その部分が清められるということです。しかもそれは「もうすでにきよくされた」と完了形で記されているのです。ですから、この「真理に従う」という選択をした者は「たましいが清められ」、神の前に聖い者としての歩みが始まった、ということです。そして、この選択は個人的なものであることを見ることができます。真理に従う決心をした者は自身のたましいを清められるからです。救いは個人的なものです。あなた自身がどのような選択をするのか、そのことを神はあなたに問い掛けておられるのです。新しい選択、新しい歩みをして行こうとするのは、その人自身のたましいが清められたからです。内側が清められなければ新しい歩みはできないのです。

☆ 天国民としての生き方とは？
１：２１迄で新しく生まれ変わった人とは、〔聖さを追求して生きてゆくようになった〕ことを学びました。その続きを見てゆきましょう。

◎真の兄弟愛をもって生きるようになった。
救われた者は心から兄弟姉妹を愛する者となった、というのです。これこそクリスチャンの特徴です。ヨハネは言います。Ｉヨハネ５：１「イエスがキリストであると信じる者はだれでも、神によって生まれたのです。生んでくださった方を愛する者はだれでも、その方によって生まれた者をも愛します。」、クリスチャンは神に救われたこと、そして、神を愛する者はだれでも、クリスチャンを愛するというのです。これが救われた人の特徴だというのです。また、同じ３：１４では「私たちは、自分が死からいのちに移ったことを知っています。それは、兄弟を愛しているからです。愛さないものは、死のうちにとどまっているのです。」と言っています。兄弟を愛していない人はその救いに問題があるとヨハネははっきり言っています。新しく生まれ変わった者は兄弟姉妹を愛するようにと変えられたのです。
そして「「偽りのない兄弟愛」とあります。「偽りのない」とは、真実の、心からのという意味です。このような「偽りのない愛」が救われた者のうちに与えられたのです。神は私の心を変えてくださったのです。詩篇５５：２１にはこのように書かれています。「彼の口は、バタよりもなめらかだが、その心には、戦いがある。彼のことばは、油よりも柔らかいが、それは抜き身の剣である。」と。どんなに立派なことを言ったとしても問題は心にあるのです。これについて、もう少し詳しく学んで行きましょう。私たちがよく読んでいるところですが、コリント人への手紙第１、１３章を見ましょう。１－３節には「たとい、私が人の異言や、御使いの異言で話しても、愛がないなら、やかましいどらや、うるさいシンバルと同じです。また、たとい私が預言の賜物を持っており、またあらゆる奥義とあらゆる知識

とに通じ、また、山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、愛がないなら、何の値うちもありません。
また、たとい私が持っている物の全部を貧しい人たちに分け与え、また私のからだを焼かれるために渡しても、愛がなければ、何の役にも立ちません。」と、ここに書かれていること、異言、預言、知識、完全な信仰、施しなどは、コリントの人たちが求めていたことです。このような賜物をもっていたらその人は霊的であると思われていたからです。だからパウロは彼らに教えるのです。そのような賜物よりももっとすぐれたものがあるのだということを…。それは愛だといいます。「愛がなければどのようなこともむなしい」と言っています。行動がどれほど立派であってもその心のうちが利己的であることは、私たちがよく見ることです。イエスは警告しておられます。マタイ６：１，２「人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい。…施しをするときには、人にほめられたくて会堂や通りで施しをする偽善者たちのように、自分の前でラッパを吹いてはいけません。」と、人に見せるために人前で善行をしないように、そして「施しをするときには」と、この「施し」とは「慈善の行為」ですが、その動機が問われることを警告しているのです。神がご覧になるのは心の動機だからです。
　そして、コリント１３章の４節からは「愛の定義」が教えられています。「愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばずに真理を喜びます。すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。愛は決して絶えることがありません。預言の賜物ならばすたれます。異言ならばやみます。知識ならばすたれます。」と。愛が寛容であり、親切であることは私たちには何ら抵抗なくわかります。しかし、続く「人をねたまない、自慢しない、高慢でない」と言われると、私たちがもっている「愛」の定義から少しずれ始めます。このパウロのメッセージがまず届けられたのはコリント教会の人たちです。彼らはいつも人のことを見て、賜物をもっていること、もっていないことについて、自分と比較して自慢したり、また反対にねたみをもったからです。私たちは常に自分を他の人とを比較する者です。しかし、みことばは教えます。自分のことは捨てて、兄弟姉妹のために力を尽くすようにと。「怒らず、人のした悪を思わず」とは、まちがった怒りをもたないということです。そのようなことは言われたくないとか、私はそのような者ではない！と怒りをもってしまう私たちに、神はこのように教えています。愛とは赦すことです。神が赦しておられることを私たちは赦していない、そこには喜びがありません。私たちはそれを悔い改めて、その人のために神の祝福を祈ることです。完璧な愛を示されたイエスが模範です。このイエスに似る者へと神は私たちを変えてくださるから、このような愛の実践は可能なことなのです。そして、「愛は決して絶えることがない」と、いろいろな賜物はすたれていくが、愛だけは永遠に存在される神の愛ゆえに、永遠に続くものだと言うのです。ですから、私たちは神が私たちに注いでくださったこの「愛」が私たちを支配するように歩んでゆくことです。
　２２節の後半に「…兄弟愛を抱くようになったのですから、互いに心から熱く愛し合いなさい」とあります。兄弟愛をもつようになったのだから、「互いに熱く愛し合いなさい」と、ペテロは読者一人一人の意志に訴えるのです。なぜなら、これは一人一人の努力が必要だからです。ローマ１２：１０には「兄弟愛をもって心から互いに愛し合い、尊敬をもって互いに人を自分よりまさっていると思いなさい。」とあります。私たちの信仰が成長してゆくのに必要なことは人々に愛を分け与えることです。信仰の幼子は自分がもっと愛されることを求めます。その考えが利己的だからです。人からしてもらうことばかり求めるのです。もし、心の中に不満があるなら、変わることはないし喜びもないでしょう。しかし、信仰の成長した人は人のために何をもって仕えてゆくかを考えます。信仰はその長さではありません。プライドを捨てて人に仕える者となること、その積み重ねが信仰の歩みなのです。あなたに欠けているものは何もないのです。
２２節の「兄弟愛」ということばの元になっていることばは、フィレオの愛です。ところが、その後の「愛し合いなさい」の「愛」はアガペの愛です。ペテロはこのように「愛」を使い分けています。神の愛をもって兄弟姉妹を愛してゆく選択をしなさいと言うのです。神がそうであるように、私たちもそれにならいなさいというのです。神から与えられたものを人に分け与えて行くこと、その生き方がこの世に対するクリスチャンの証なのです。ヨハネ１３：３５に「もしあなたがたの互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」とあるとおりです。人に求めるのではなく、自分が変わることです。愛は育てること、努力することでもあると、私たちは知るべきです。私たちの選択はいつも神が喜ばれることは何かを考え、実践することです。
そして、それを成してくださる神の栄光が現わされるのです。

☆では、どのようにそれができるのでしょう？

兄弟を心から愛すること、それは信仰に至った者の責任であることをペテロは教えます。さて、どうしてそれができるのでしょう？その理由について２３節から続けています。２３－２５節「あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種からであり、生ける、いつまでも変わることのない、神のことばによるのです。『人はみな草のようで、その栄えは、みな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。しかし、主のことばは、とこしえに変わることがない。』とあるからです。あなたがたに宣べ伝えられた福音のことばがこれです。」。ペテロは何度も救いのすばらしさを教えます。私たちに「救いのすばらしさ」を思い起こさせるのです。それは神の命じることを行ってゆくためです。救われたことを覚えなさい、神が私に何をしてくださったかを、いつも覚えなさいと言います。
「新しく生まれたのは」は完了形です。すでに救われたクリスチャンに対して言うのです。「朽ちる」とは１：１８にも１：４にも出てきましたが、限界があることを教えています。永続しないのです。しかし、神は違います。永遠である神だから永遠を与えることができるのです。そして、「朽ちない種」が神のことばであることは明らかです。「朽ちる種」から芽生えた草は時期が来れば枯れてしまいます。しかし「神のことば」は枯れることがない、寿命がない種であると教えています。そのことをペテロは、イザヤ書の４０章６－８節のみことばを引用してここに記しています。神のことばが永遠に続くものだと。イエスもこのように言われています。マタイの福音書２４：３５「この天地は滅び去ります。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。」と。このみことばを言われた方が永遠なる神だからです。変わることのない神のことばが人間に与えられ、それは今も輝き続けているのです。

☆「朽ちない種」であるみことばが私たちにもたらすもの
いのち＝生きている種を蒔いて水をやればそれは芽を出してきます。私たちに新しいいのちが与えられるのです。
信仰の成長＝この朽ちない種によって私たちは成長するのです。いのちのある種はどんどん成長してゆきます。私たちが神のみことばを聞き、聖霊なる神が心の中に働くとき、私たちは初めて自分の罪を悔い改めてイエス・キリストを信じます。そして永遠のいのちをいただきます。このような過程を経て私たちは救いに至ったのです。神はすべての人にこのように働かれるのです。救われた者はその態度、ことばが変わってきます。そして、成長に必要なことがここに二つ述べられています。２：１「ですから、あなたがたは、すべての悪意、すべてのごまかし、いろいろな偽善やねたみ、すべての悪口を捨てて、」
１）雑草を除去する、五つの雑草が記されています。心の中のすべての、悪意＝人に対しての悪い思い、仕返しの思いです。ごまかし＝たくらみ、策略です。口で言っていることと心で考えていることが違うというようなことです。偽善＝見せかけ、ある役を演じるということです。見せかけの信仰的であるかのような生き方をしていないかどうかです。ねたみ＝嫉妬心をもつことです。あらゆる悪口＝そしり、誹謗、非難、批判的であることです。これらは成長を妨げるものです。罪です。だから、これらのものをすべて捨てなさいというのです。
２）肥料を与える、肥料とはみことばです。２：２「生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。」、この「慕い求める」とは「〇〇に向かって」と「熱望する」ということばの合成語です。私たちを成長させてくれるみことばを必死になって求めることです。もっと神のことを知りたい、もっと私は成長して行きたいと願うのです。
みことばを学ぶ機会を逃さないで「主よ、わたしに語ってください」と謙虚に願うことです。
変化が訪れる＝２：３「あなたがたはすでに、主がいつくしみ深い方であることを味わっているのです。」イエスを信じた者はすでに神がどれほどいつくしみ深い方であるかを知っています。みことばを学ぶほどに私たちはなおそのことを深く理解してゆきます。と同時に、自分がどれほど罪深い者であるかが分かってくるのです。自分が低い者とされてゆくのです。

⇒これが神のみこころです。自分が変わること、それによって私たちの群れ全体が変えられて行くのです。今日、救われた者としてのこの地上での生き方を学んできました。神のメッセージを聞いて一人一人がどのように歩んでゆくのか問われています。教えられた通りに歩んで行きたいと願い行なってゆくことです。